

# 未来への

# スタート

2012年はオリンピックイヤー。開催地のイギリスだけでなく、世界中の人々が4年に一度のスポーツの祭典を待ちわびている。いつでもどこでも、多くの人を引き付ける魅力のあるスポーツ。国際協力の世界でも、開発途上国の国づくり、人づくりに有効なアプローチとして注目が高まっている。スポーツに秘められた未知なる可能性。オリンピックを機に、あらためて考えてみよう。

編集協力：黒田次郎・近畿大学産業理工学部講師（青年海外協力隊OB／コスタリカ／野球）

## みんなが参加できるスポーツ

梅雨が明けるといよいよ夏も本番。まぶしくらいに照りつける太陽、うだるような暑さが待っているが、こんな時だからこそ、スポーツに汗を流すのも気持ちいい季節になってきた。



JICAオフィシャルサポーターは世界各国を飛び回り、スポーツを通じた国際協力にも取り組む



JICAオフィシャルサポーターもスポーツで国際協力!

JICAオフィシャルサポーターを務めるのは、北澤豪さん、高橋尚子さん、クルム伊達公子さんの三人。誰もが知る日本の名だたるスポーツ選手たちだ。彼らは年に数回、開発途上国を訪問し、JICAのプロジェクトや青年海外協力隊の活動などを視察。帰国後は国際協力関連のイベントや自身の講演会などの場で、「途上国の現場で起こっていること」を私たちに分かりやすく伝えてくれている。

そして途上国に滞在中は、彼らの強みである「スポーツ」を通じた交流も積極的に行っている。彼らと体を動かす子どもたちの笑顔は、何ものにも代えがたい。「スポーツに携わる者として国際協力を続けていきたい」と語るサポーターの3人。スポーツに国境はない。途上国の子どもたちと汗を流している姿を見ていると、まさにそのことが実感できる。

へ大きな一歩になるかもしれない。

JICAは途上国におけるスポーツの重要性にいち早く着目し、ボランティア派遣などを通じて、情操教育としての体育、競技としてのスポーツの普及に取り組んできた。「コミュニティレベルのクラブ活動からナショナルチームの指導まで支援の範囲は幅広い」と黒田先生。現在は「情操教育を通じた青少年の育成」(8ページに関連記事)、「ナショナルチームへの指導」(12ページに関連記事)、「健康増進、障害者スポーツへの寄与」(14ページに関連記事)を三本柱に、企業やNGOなどの団体なども巻き込みながら、スポーツ分野の協力を強化している。未知なる可能性を持つスポーツ。それは途上国の人々の未来へのスタート。

便利になるにつれて、体を動かす機会が減っているこの時代。定期的に意識して体を動かすことで、健康・体力の維持にもつながる。また「心理的」な側面で言えば、スポーツは規律や助け合いなど精神を鍛える効果がある。フェアプレイやスポーツマンシップを身に付けることは、人間力の向上にもつながるのだ。

そして7月末には、4年に一度のスポーツの祭典、ロンドンオリンピックが開幕する。水泳、柔道、マラソン、体操。学校でも職場でも、話題はオリンピック。学校でも職場でも、話題はオリンピック。学校でも職場でも、話題はオリンピック。学校でも職場でも、話題はオリンピック。

## ブルキナファソで柔道の発展を目指す

日本発祥のスポーツといえばやはり「武道」。中でも柔道は、男女ともにオリンピック競技になっているほど世界でも知名度の高いスポーツだ。そしてその人気は、海を越えて、アフリカ大陸にまで広がっている。その一つが西アフリカのブルキナファソ。国内に柔道連盟が設立されてからすでに半世紀以上。現在は25のクラブチームが加盟しており、競技人口もアフリカ大陸の中で群を抜いている。しかし実際、競技に必要な不可欠な量や柔道着などが不足しており、練習環境でさえ十分に整っていない状況。そこで日本は無償資金協力を通じて、2011年に量や柔道着を供与。両国の友好の証しともいえるこれらの引き渡しを記念し「柔道日本大使杯」も開催された。「これで満足に練習ができます」と選手たち。日本の支援で贈られた柔道着に身をまとい、ブルキナファソから金メダリストが誕生する日もそう遠くないかもしれない。



には、人をひき付ける不思議な魅力があるのだ。「オリンピックやワールドカップなど、スポーツの国際大会での競争」は、武力闘争ではない。スポーツ外交という言葉があるように、国家間の相互理解にもつながります」と、近畿大学産業理工学部の黒田次郎先生は話す。そして、プロ

に与ることも一般の人々にとっても、スポーツは誰もが気軽に参加できる活動。生活の質(Quality of Life)を高めるものとして、子どもから大人まで、多くの人に親しまれている。私たちは、意識せずとも、スポーツを通してさまざまな恩恵を受けている。まず一つは「身体的」な側面。日常生活が

開発途上国の人々に豊かな生活を 私たち日本人にとっては、小学校の時から当たり前のように「体育」の授業がある。テレビをつければスポーツ観戦ができ、余暇の時間にも公共の施設などで運動するチャンスはいくらでもある。

しかし、開発途上国では、教育、保健、環境などさまざまな課題が山積する中で、スポーツの位置付けは決して高いとは言えない。「先進国以外では、スポーツは、生活に余裕がある人がするもの」という意識が強い」と黒田先生は話す。しかしこの10数年、国際社会では「スポーツと開発」の効果が注目され始めている。2003年に「開発と平和のためのスポーツ国連タスクフォース」が発足。05年は国連により「スポーツと体育の国際年」として定められ、教育、健康、開発、平和を促進する手段としてスポーツと体育の役割への理解が促された。スポーツをすることで健康が維持できれば、途上国の人々の医療費の削減にもつながる。ミレニアム開発目標(MDGs)に貢献するものとしても期待が高まっている。



【上】杉浦勉・在ブルキナファソ特命全権大使から柔道着の引き渡しが行われた  
【下】オリンピックを目指し練習に励む子どもたち